名古屋経営短期大学紀要　第 65 号　33～40 頁

社会人基礎力の現状把握

―保育インターンシップを通して―

Understanding of the current Status of Basic Skills for working Adults:

Through Childcare Internship

加藤　多美
Tami Kato

〈摘　要〉

近年、子どもの育ちに様々な問題や課題があるとされている。コミュニケーション能力や自分を信じる力の弱さなど、さらには、基本的な生活習慣が身についていない様子も散見される。保育士や幼稚園教諭の資格取得を目指す学生の多くは、その職業にあこがれや夢を抱き、入学をしてくる。専門職と言われるこれらの職業であるが、保育園や幼稚園、その他の福祉教育施設は社会の中の一施設であるため、こうした福祉教育施設で活躍するためには、「社会人基礎力」を身につけていくことが必須と言えよう。目指すところは、「職業教育を基盤として、豊かな人間性を育て、その上で特定の領域における専門性を身につけることによって、社会に出て、主に保育士や幼稚園教諭・小学校教諭などの領域で活躍すること」である。そこで本研究では、資格取得に向けた学びの中に、保育インターンシップを取り入れ、その効果に関し、社会人基礎力についての調査を行った。

（キーワード）　社会人基礎力　インターンシップ　保育者養成　職業教育

はじめに

「社会人基礎力」とは、経済産業省が 2006 年から提唱しており、「職場や地域社会で多様な仕事をしていくために必要な基礎的な力」であり、以下の 3 つの能力である。

① 前に踏み出す力（アクション）
② 考え抜く力（シンキング）
③ チームで働く力（チームワーク）

そして、①は、「主体性」「働きかけ力」「実行力」、②は「課題発見力」「計画力」「想像力」、③は、「発信力」「傾聴力」「柔軟性」「状況把握能力」「規律性」「ストレスコントロール力」の１２の能力要素からなるものである。経済産業省によると、これらの「社会人基礎力」は、

「基礎学力」と「専門知識」と相互に影響を与えながら向上していくと説明している。

インターンシップを通じた社会人基礎力の調査には、「社会人基礎力を育成する大学生インターンシップの試み－マルティニーク島でのコミュニティエンゲージメント型インターンシップの実践例－」（中西久実子、山分志穂、フランソワ・レジナ：2020）や、「保育士・教員養成段階におけるキャリア形成支援－インターンシップの効果的な実施方法を探る－」（平井敏孝、伊藤孝子、藤山あやか：2020）などの研究の蓄積は多く存在する。また、社会人基礎力グランプリの開催など、多くの大学・短期大学において、学校の内外、正課科目、正課外の活動において、社会に出て活躍するために必要な能力を身につけることを目指した取り組みが行われている。

名古屋経営短期大学が目指す「社会で活躍できる人材」を養成するためには、「社会人基礎力」を身に付けることは重要である。そこで、本研究では、資格取得に向けた学びの中に、保育インターンシップを取り入れ、その効果に関して、社会人基礎力に関する調査を行う。

名古屋経営短期大学の建学の精神は、「職業教育を通して、社会で活躍できる人材の育成をすること」である。理念は、「職業教育を通して、豊かな人間性と技能を育み、社会に貢献し、社会とともに幸せな生活を営むことのできる人材を育成すること」である。さらに、子ども学科の理念は、「保育士や幼稚園教諭・小学校教諭を目指し、高い専門性と豊かな人間性に富んだ人材を育成する」ことである。

職業教育を基盤として、豊かな人間性を育て、その上で特定の領域における専門性を身に付けることによって、社会に出て、主に保育士や幼稚園教諭・小学校教諭などの領域で活躍することが子ども学科では求められている。本論文では、名古屋経営短期大学の子ども学科を取り上げる。特に、実習領域に参加する前の保育インターンシップの意義と効果について取り上げる。

保育実習に対して不安を感じる学生が多く、保育実習開始前や実習中に、実習そのものを辞退してしまう学生も少なくなかったようである。さらに、実習の辞退と同時に資格の取得を諦める学生もいる。実習に対する不安を払拭するために、選択科目としてインターンシップが配置されるようになった。しかしながら、新型コロナウイルスの流行により、インターンシップはおろか、保育実習も通常に行うことができない事態が起こった。学内だけでの学びを余儀なくされた学生らの中には、社会に出ていく不安を抱いている者もいた。

このことからも、保育者を目指す学生には、保育者としての「専門知識」の習得だけでは、活躍できる人材とは言えないことは明確である。保育園や幼稚園、その他の福祉教育施設は社会の中の一施設である。子どものことを学ぶと同等に、そこに関わっている大人についても理解しておくことが求められる。価値観の違う大人同士の中で仕事をすることや、大切なわが子を保育園に預けている保護者との関係性を構築していくことなどは、「専門知識」があるだけでは、乗り越えられるものではない。資格取得のための 3 年間では、アクティブラーニングを重視した授業への参加や学内外のイベントに携わることなどの経験を通し、課題へ

の向き合い方や、クラスメイトやメンバーと協力することなど多くの葛藤や苦労を積み重ねることで得られる力があると考える。

Ⅰ．保育インターンシップの概要

1．科目名

保育インターンシップ

※選択科目としているが、今回は学科の全学生に履修を推奨した。

２．目的

今回の保育インターンシップは、令和５年度末に実施する保育実習Ⅰに繋げるために、以下の４つを目的として実施した。

保育インターンシップについては、これまでも様々な形で施行されてきたが、今回実施する形は、令和５年度から新たに実施するものである。

（1）幼稚園または保育園の一日の生活の流れを知る。

（2）保育者の仕事を知る。

（3）保育者の子どもへの関りを知る。

（4）保育者の基本的態度を知る。

「室内外の清掃」「環境整備」「配膳」「子どもたちとの関わり」などの場面で、保育者の補助的な役割を中心とする経験を通して、保育者という職を体験的に理解することをねらいとした。

３．実施期間

今回の保育インターンシップは、令和５年７月から９月にかけて実施し、実際のインターンシップ前後に事前学習・事前準備と振り返り・課題整理を１日ずつ設け、４日間を現地でのインターンシップにあてた。

【プログラム】

１日目	学内で行うオリエンテーションに参加する、インターンシップ園の調査などの事前学習を行う、事前訪問に出向く、名札作成・絵本選定などの事前準備を行う
２日目	幼稚園や保育園で保育インターンシップに参加する ８：30～17：00

3 日目	幼稚園や保育園で保育インターンシップに参加する 8：30～17：00
4 日目	幼稚園や保育園で保育インターンシップに参加する 8：30～17：00
5 日目	幼稚園や保育園で保育インターンシップに参加する 8：30～17：00
6 日目	学内にて、４日間の振り返りとまとめ学習を行う

現地での主な活動
・室内外の清掃
・環境整備
・配膳
・子どもたちとの関わりなど

４．インターンシップの流れ

保育インターンシップを履修する学生への報酬は、無報酬とする。また、保育インターンシップに伴う交通費、食費及びその他の諸経費は、原則として学生の負担とする。

学生が調査票に、第一希望園と第二希望園を記入する。それに基づき教員が受け入れ先に申し入れを行い、調整し、決定とする。

学生に対し、保育インターンシップへの積極的な参加を促し、主体的に取り組めるように実施に向けて事前のオリエンテーション等で、必要な支援を行う。インターンシップ期間中は、巡回指導は行わないものとするが、必要に応じ、インターンシップ先と連携を取り、支援する。

Ⅱ．調査の方法

秋学期末の保育実習Ⅰに参加する前に、夏休み期間を利用して 4 日間の保育インターンシップに参加するように、学生に周知され、24 名の学生が履修した。その 24 名を対象に、保育インターンシップに参加する前と後の２回、「社会人基礎力」についてのアンケートを実施し、現状把握から分析を行った。

受講の学生に対して「社会人基礎力の 12 項目に関するアンケート調査」を行った。
対象者：保育インターンシップ受講学生 24 名
実施時期：2023 年 7 月、9 月

質問項目：社会人基礎力以下 12 項目、①「前に踏み出す力」に属する「物事に進んで取り組む力」「他人に働きかけ巻き込む力」「目的を設定し確実に行動する力」、②「考え抜く力」に属する「現状を分析し目的や課題を明らかにする力」「課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力」「新しい価値を生み出す力」、③「チームで働く力」に属する「自分の意見を分かりやすく伝える力」「相手の意見を丁寧に聴く力」「意見の違いや立場の違いを理解する力」「自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力」「社会のルールや人との約束を守る力」「ストレスの発生源に対応する力」である。「以下の能力について自己評価で５段階で記載してください」と質問し、５段階の選択肢から選んでもらう５件法で調査を実施した。

Ⅲ．結果

アンケート結果は、表１、表２の通りである。

表１．社会人基礎力「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」の３つの能力を構成する１２の能力要素の事前事後の自己評価の推移

		事前		事後			
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	差	P値
物事に進んで取り組む力	24	3.00	1.02	3.00	1.32	0.00	**1.0000**
他人に働きかけ巻き込む力	24	3.08	1.25	2.50	1.06	-0.58	**0.0695**
目的を設定して確実に行動する力	24	2.67	1.27	2.67	1.13	0.00	**1.0000**
現状を分析し目的や課題を明らかにする力	24	2.75	1.22	2.75	1.36	0.00	**1.0000**
課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力	24	2.50	1.22	2.33	0.96	-0.17	**0.5385**
新しい価値を生み出す力	24	2.58	1.18	2.17	1.17	-0.42	**0.1345**
自分の意見を分かりやすく伝える力	24	2.67	1.52	2.17	1.17	-0.50	**0.1366**
相手の意見を丁寧に聴く力	24	3.75	1.29	3.67	1.27	-0.08	**0.7466**
意見の違いや立場の違いを理解する力	24	3.67	1.27	3.25	1.22	-0.42	**0.1345**
自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力	24	3.33	1.13	3.08	1.10	-0.25	**0.1853**
社会のルールや人との約束を守る力	24	4.08	1.02	3.50	1.06	-0.58	**0.0695**
ストレスの発生源に対応する力	24	2.83	1.55	2.75	1.36	-0.08	**0.8142**

表２．社会人基礎力「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」の３つの能力の事前事後の自己評価と第三者評価の差異

		第三者		事前		事後		事後-事前	第三者-事前	第三者-事後
	n	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差			
「前に踏み出す力」	24	2.08	0.88	2.92	0.91	2.72	0.92	-0.19	-0.83	-0.64
「考え抜く力」	24	1.36	0.65	2.61	1.04	2.42	0.97	-0.19	-1.25	-1.06
「チームで働く力」	24	1.96	0.82	3.39	0.93	3.07	0.81	-0.32	-1.43	-1.11

インターンシップに参加する事前と事後の自己評価の推移、第三者である指導教諭の評価について分析したところ、全体の傾向として、自己評価と第三者評価に差異があり、自己評価が 1 ポイントから 1.5 ポイント程度高くなっていることから、学生の自己評価が総じて甘いものになっていることが推測される。

3 つの力のうち、考え抜く力の数値が最も低い。第三者の評価は平均 1.36 で標準偏差が 0.65 と獲得できていない能力が多く、ほぼ全ての学生の能力が低い水準であることを示している。また、学生の事前アンケートの結果は、平均 2.61 で標準偏差が 1.04。総じて低い能力を自覚していることがうかがわれるが、第三者の平均値との差は 1.25 ポイントで、標準偏差も幅広くなっており、実際より高く評価している傾向がみられる。さらに、事後アンケートの結果では、平均 2.42 で標準偏差 0.97 と事前アンケートの結果と比べ数値が下がり、標準偏差のばらつきも少なくなっている。

Ⅳ．考察

学生の自己評価については、保育インターンシップの事前の回答と比べ、事後の回答が全体的に低下し、指導者による第三者評価との差が縮まっている。このことから、各学生が保育インターンシップにより保育現場での仕事を体験することで、今の時点で自分が出来ることを理解し、自分自身に不足しているものを理解しようとした、または、理解した可能性が高いと考えられる。

今後、同じ集団に対して保育インターンシップを実施する前後に同様のアンケートを実施し、その結果の推移をみることで、保育インターンシップが学生に与える影響や、どのように成長が図られているかを分析することも可能と考えられる。

今回、特に数値が低かった「考え抜く力」の向上は、今後、本校の学生が社会で活躍できる保育者となっていくために欠かせないものであると考えられるため、こうしたアンケート

の結果を踏まえ、学生に対してどのようなアプローチ、指導を実施していくか、さらには本学科のプログラム全体の再構築を含めて検討していく必要がある。

Ⅴ．今後の課題

本研究では、「社会人基礎力」に関する調査を行なった。
調査の結果、以下の２点が明らかになった。1 点目は、未経験の段階では、自己の力を過大に評価する傾向があること。2 点目は、保育インターンシッププログラムを経験することで、不足する能力などを認識できたことである。

今回の調査では、保育実習の前段階として実施する、保育インターンシップに着目した。保育実習は長期間に渡り現場での実践的な内容に取り組むことから、毎年度何人かの学生が自分が想像していた仕事内容とのギャップや、自分自身の能力の自己認識と実際に実習で経験することのギャップが大きいことで、途中リタイアしてしまうことがある。

調査結果から、保育インターンシップは、上記の保育実習の前段階として、自分自身の能力の現在地を知る観点からも有益なものである可能性を示唆したと考えられる。具体的には、社会人基礎力について、事前の自己認識と第三者評価のギャップが大きく、自分自身の評価が過大であったものが、事後の自己認識では第三者評価とのギャップが縮まったことが挙げられる。

保育インターンシップのような取り組みを積み重ねることで、学生の自己認識を現実に近づけていくことができれば、現場を未経験のまま保育実習に臨むことで感じる現実とのギャップを少なくし、途中リタイアする学生を少なくすることも期待できる。

今後の研究課題としては、保育実習での効果を検証する。今年度新たに保育インターンシップに参加した学生と、前年までの保育インターンシップ不参加学生との実習中、実習後の違いを比較調査することによって、効果検証などを継続していきたいと考える。

＜参考文献＞

・中西久実子、山分志穂、フランソワ・レジナ（2020）「社会人基礎力を育成する大学生インターンシップの試み－マルティニーク島でのコミュニティエンゲージメント型インターンシップの実践例－」研究論叢(95)161-175.

・平井敏孝、伊藤孝子、藤山あやか（2020）「保育士・教員養成段階におけるキャリア形成支援－インターンシップの効果的な実施方法を探る－」起要 BULLETIN OF SHIGA BUNKYO JUNIOR COLLEGE (22)17-28.

・経済産業省（2006）「社会人基礎力に関する研究会－「中間とりまとめ」－」
https://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/sansei/jinzairyoku/jinzaizou_wg/pdf/001_s01_00.pdf
2023 年 9 月 1 日アクセス
・経済産業省ホームページ「社会人基礎力」https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html 2023 年 9 月 1 日アクセス
・名古屋経営短期大学 ホームページ「３つのポリシー」https://www.jc.nagoya-su.ac.jp/guide/policy/
2023 年 9 月アクセス